

台湾・朝鮮植民地国語教科書の比較

——大正・昭和初期教科書の現地採集の教材について——

酒 井 恵 美 子

一 はじめに

日本では大正時代から昭和にかけての時期、欧米の影響を受けてはじまった「新教育運動」が盛んであった。日本は明治に入って公教育を開始し、欧米の教育を模範としつつ、日本の教育を切り開いてきたが、形式的で、画一的なものであったことは否めない。そのような教育の偏りを学習者中心の新しい教育に変革するべく、「新教育運動」は始まった。それは単一の運動と言うよりは、大正デモクラシーを時代背景に教育者のみならず、多くの人々の百家争鳴の教育論が飛び交う多様な教育運動であったと言われている。

当時は国定制であった教科書もこのような運動の例外ではなく、それまでの教科書に変わり、斬新なものが編纂された。唐沢（一九六〇）によればこの期の教科書は視点を海外に向けた国際的教材や児童の好みそなうな文学教材がもっとも多く、ナショナリズムや軍国主義的な教材のもっとも少ない教科書だという。国定読本の中ではこの時

代の雰囲気を反映した児童中心主義の教科書といえよう。

その流れは内地のみならず植民地にも波及していた。板倉（一九六八）はこの時期の台湾などの理科教科書が内地の教科書よりも子どもたちに興味を呼び起こさせるべく表現を書き改めていることを指摘している。そればかりでなく、子ども自身の積極的な活動をよびおこすために作られた南満州教育会・教科書編集部編纂「満州理科学習帖」や朝鮮総督府編纂「初等理科書」（一九三一年より使用）は内地よりも先進性のものであったと述べている。そして「台湾や朝鮮などの植民地では自然条件その他が著しく違うことを考慮して、本国とは別の教科書を作成させていた」が、「それら植民地では自然条件の違いを考慮するだけでなく、本国では文部省にうけいれられなかった理科教育改革運動の考え方を広範に受け入れて、それを教科書の中にもりこんだ」とその経緯を説明している。理科教科書は内地では教科書編纂が難しく、改訂が行われなかったという事情もあり、植民地では内地より一歩進んだ教科書編纂が可能だったのである。その結果紆余曲折を経て一九三九年に作成された内地の新教科書の「題目／内容配当表」は朝鮮総督府の「初等理科書」にそっくりだったという逆転現象も起きているという¹⁾。

しかし、植民地編纂の国語教科書は理科教科書と異なり、児童中心と言うことでは、編纂に困難な面がある。その一つは教材の選択にある。内地の教材には多かれ少なかれ日本的な文化や社会現象が含まれ、児童にとっては宗主国という反感を感じる領域に属するものである。その点を別にしたとしても文化的な違いからなじみが薄い。反対に学習者にとって身近な現地の教材は、植民地統治という観点からは不必要な民族意識を喚起する可能性があり、望ましいものではないのである。

さて、国語教科書では、新教育運動の時期に活躍し、のちの生活綴り方運動の基礎を築いた芦田恵之助が朝鮮読本第 期（全八巻）を編纂している。その経緯は芦田（一九六二）に詳しいが、それによると彼はこの教科書のす

べての巻を執筆したことが記されている。まさに彼の教育観がよく表れた国語読本と言える。芦田恵之助は16歳で授業生といわれた非正規教員からスタートした異色の教育者である。学歴のない彼を編修官として抜擢できたのは朝鮮が植民地であつたからであるというのも推測できる事情であり、板倉の言うように内地では受け入れられないような特例的な事情が国語教科書でも存在したことは想像に難くない。

本稿ではこの芦田恵之助編纂の朝鮮読本第 期を手がかりに朝鮮で芦田により学習者中心の教科書が編纂されたのかどうか、考えたい。その方法として本稿は先に述べたような学習者にとつて身近な現地採集の教材をどのように教科書に取り込んだかについて考察し、それを台湾の国語教科書と比較することにより試みたいと思う。紙面の関係上、今回は人物教材を中心に教材採択のあり方について見ていくことにする。

二 朝鮮第 期について

では、まず、朝鮮読本第 期についてみてみよう。

先に述べたように朝鮮読本第 期を実際に執筆したのは新教育運動の著名な実践家の一人芦田恵之助である。芦田は大正一〇年より朝鮮に赴き、三年をかけて教材にとりあげた各地方を調査しつつ、執筆を行った。芦田（一九六二）によると彼がこの教科書を執筆する際に「（教科書の）内容が、民族意識を高めて、その幸福を将来するものでなければならぬ」と思い、「この読本によつて、平和を翹望する民族たらしめたい」と考えたことを書き残している。朝鮮民族には「日本民族に対して、先学者であるという根の深い誇り」があり、「この誇りをやぶらないで、流転のやむなきことを知らせ、いたずらに固執しないこと」を「児童の生活にちかきもの、又は生活によつて解せらるゝ事実を通して」理解させるといふものである。自尊心を守りつつ、植民地となった現実を受け入れるこ

とは一見矛盾する考え方であるが、植民地で自由主義的な教育を行うに当たっての彼の教育者としての現実的な考え方がよく出ている。彼は日本の植民地となったことはやむを得ないことなので、これを受け入れ、しかし、民族意識は高めて、誇りを堅持するということを主張する。彼にとって大切なことは闘争を避けることであり、それにより、平和を得ることである。現状の受容という現実的な道をとりながらも、民族としての誇りを失わず、平和で幸福であることを希求する。そのような考え方を児童の身近な材料を通じて納得させるといのである。この子どもたちの自尊心を尊重し、子どもたち自身の活動を喚起すること、そして、そのために理解しやすい身近な興味を持てる材料を選択することは新教育運動の共通する考え方であるが、そのような道が当時の朝鮮人たちにとってよいものであったかどうかは別として、芦田は子どもたちに興味のある教材として朝鮮で現地に多く取材を行っている。

では、次に彼の編纂した教科書の人物教材について見ていこう。

左にあげる表一は朝鮮読本第 期で取り上げられた人物教材である。取り上げた人物は課の中心的な人物としてその業績がテーマになっている人物であり、且つ氏名を挙げるなど、実在の人物として教えられたと考えられるものに限った。この実在というのは歴史的な事実として実在したかどうかではなく、実在だと児童に思わせるように書かれているかどうかが重要である。もし、歴史的には実在しないものでも児童たちがそう受け取っていれば、印象は大変強いものとなり、児童は歴史的な人物と同様に現実のものと理解するからである。

表一

巻	課	課名	備考
三	一〇	花のにおい	新羅王女徳曼
四	二三	扇のまと	那須与一
四	二四	雪舟	
五	九	仁徳天皇	
六	五	昔脱解	
六	七	虎狩	三宅巡查
六	一〇	弓流し	源義経
六	一四	万寿	
六	二二	七里和尚	
七	六	李坦之	
八	六	吳鳳	
八	一六	乃木大将	
八	二〇	皇太子殿下の海外御巡遊	
八	二五	菅原道真	
八	二六	大空に迷ふ	小沢軍曹

朝鮮読本第一期で実在の人物として描かれているのは一五人である。巻六の昔脱解は卵で生まれるなどで創世神話的な記述があり、実話とは思えない面があるが、実在の新羅草創期の王として、描かれていることから、ここでは実在の人物として扱った。朝鮮では誰もが知っている人物である。

表一の一七人の人物は実在の人として名前を挙げて、その事績を記述しているが、その描き方は事実の説明ではなく、物語として児童が関心をもたれるような書き方になっている。例として第二学年配当の巻三「花のにおい」を見てみよう。

むかし新羅の王女にとくまんというかたがありました。たいそうかしこくて又お心の美しいかたでした。

ある日唐の天子からとくまんのおとうさまのところへりっぱなはたんの花のえとばたんのたねがとどきました。おとうさまはたいそうおよろこびになってさつそくとくまんをよんでそのえをお見せになりました。

とくまんはお美しい花とながめていらっしやいました。しばらくしておとうさまこの花は美しうございますが、おしいことにはよいにおいがありませんとおっしゃいました。

おとうさまはそれがどうしてわかるかとおたずねになりますと、これほど美しくさいている花にはちもちょうちようも来ていません。この花には虫がしたつて来るようなよいにおいがないのでしょうかとおこたえになりました。そのたねをつえてみると花はりっぱにさきましたがよいにおいありませんでした。³

この「花のにおい」は新羅のとくまん（徳曼）王女の幼い頃の逸話である。彼女はのちに朝鮮で初めての女王になるが、戦後も学校の教科書に登場し、ドラマ化されるほどの人気の高い歴史上の人物である。

王女は唐から送られた「りっぱな花」の匂いがないという見えない性質をただ一人見抜く。その王女の利発さもさることながら、新羅の後の歴史的な発展を考えるとテーマには深いものがあるが、全体としては童話のような親しみやすい教材である。芦田はこの教材を朝鮮の歴史書『三国史記』より採ったとしており、史実として考えてい

たことが伺える。しかし、彼はこの課で徳曼の奇智を描くことが目的ではなく、すべての奇智は「真面目な観察」に基づくものであり、自分の目で見るこの態度を養うことをこの課の目的としている。伝説でありながら、ただの物語ではなく、教訓として描かれているのである。

次にこれら人物の出自を見てみたい。最も多いのは日本人で一〇人、朝鮮人（課名太字）四人、中国人（傍線）一人である。この期に内地で多く採択されたアメリカやヨーロッパの人物は教材として出てこない。朝鮮の子供たちの教材として全体の三分の一しか、朝鮮人教材が採用されなかったのは大変少ないと言わざるを得ない。

三 台湾読本第 期について

台湾読本第 期は一九二二年に刊行された。朝鮮読本第 期は一九三年なのでほぼ同時期である。大正から昭和にかけて使用された教科書である。ただ、朝鮮の普通学校とは異なり、台湾公学校は当初より六年制であったため、全一二巻が編纂されている。表二はそこで取り上げられた人物教材であるが、ここでは、比較のために、第八巻までを対象とし、二重線以下は参考として挙げる。

表二

巻	課	課 名	備 考
三	一二	ヲノタウフウ	
五	一	天の岩や	天照大神
五	一九	をろちたいぢ	素戔鳴尊

一一	一七	円山応挙（二）	
一二	二二	乃木大将	
一三	二六	孔子	
一四	三	チャールズ、ダーウィン	
一五	六	ノーベル賞金	
一六	一〇	金原明善	
一七	一五	児玉大将	
一八	一九	諸葛孔明	

台湾読本第 期では巻八までに一三人の人物がその業績をテーマとして取り上げられている。そのうち、日本は一〇人、ヨーロッパは二人、中国・台湾は一人である。この一人は呉鳳であるが、この人物は台湾の伝承によるものではなく、架空の人物、日本により、創作された人物とされる。中国・台湾の実在人物は巻二二まで広げても鄭成功と孔子がいるだけある。大変少ない。

台湾読本第 期にはじつは朝鮮読本と同じく、利発な機転の利く子どもたちの話がある。「カシコイ子ドモ」（台四 五）である。配当も「花のにおい」と同じく第二学年の配当である。

昔アルトコロニ、五六人ノ子ドモガアツマツテ、大キナ水ガメノソバデ、アソンデマシタ。
一人ノイタツラナ子ドモガ、カメノフチヘ上リマシタ。グルグルマハツテクル中ニ、足ヲフミハツシテ、水ノ中ヘオチコ
ミマシタ。ミンナオドロイテウロウロシテマシタ。

ソノ時一人ノ子ドモガ大キナ石ヲトツテ、イキナリ水ガメニナゲツケマシタ。スルト水ガメニ大キナ穴ガイテ、水ガドツト流れ出マシタノデオチタ子ドモハタスカリマシタ。

タスケタ子ドモハ大キクナツテカラ、名高イ人ニナツタトイフコトデス。

こちらにも瓶の中に子供が入ってしまうという事件が起きた時のとっさの子供の奇智が描かれている。もとの伝承は司馬光の七歳の時の逸話であると言われている。日本でもよく知られている逸話で、内地の読本にもしばしば登場するし、台湾では第一期から教材に採択されている。ただ、朝鮮読本ではとくまんが新羅の王女であることがきちんと描かれていているのに対し、台湾読本の「カシコイ子ドモ」では匿名の利発な男児として描かれている。確かに教材では実在の人物がしばしば実在かどうかわからないような描かれ方をする。この教材も実名が挙がることはあまりない。しかし、芦田がとくまんを実在の人物として名前を挙げたのは、子どもたちの民族意識を高めることと無関係ではないだろう。そのことを考えると、台湾読本でも、実在の人物として描くことも出来たのではないかと思われる。それをしなかったのはなぜなのであるうか。実名を記さなかった従来の内地の教材に従ったとも考えられるが、そこには台湾読本第一期からの編纂方針があるのではないかと思う。

四 植民地固有の教材採択の問題点

植民地において植民地固有の現地に採集した教材を教科書に載せるにはいくつかの問題点があると思われる。台湾読本第一期においても台湾の現地教材を採用する必要はあった。編纂方針として児童にとって理解しやすい教材を選ぶことを掲げているからである。

台湾協学会報第十六号に国語学校校長町田則文の「台湾總督府国語学校」という一文が掲載されている。これは一般になじみのない国語学校を紹介する目的で書かれたものであるが、第四として「台湾に行はるゝ古談」として橋本武の調査した説話や伝承が載っている。この調査は「其家庭の教育が如何程まで正当なる教育（支那人の所謂經学的教育）の応用を為し居る」かを実証するため学生たちに書かせたもので、九二件の古談を「教訓的」か「愛笑的」かにより分類している。先の「カシコイドモ」の話も「韓公の頓智水甕に陥りしを救ひし話（案するに韓公といふは蓋し温公の誤りなるべし）」として収集している。この調査は教材のための採集ではなかったが、後述するように橋本武は教材としての台湾固有の「採訪冊」に言及しており、このような現地の伝承の採集はこの後も行われていたと見るべきだろう。また、国語学校は台湾の日本語教育の中心的な研究機関で、教科書編纂者たちと交流がある。このような調査について編纂者が知らなかったとは考えにくい。それなのに台湾読本第 期には台湾に由来する物語は一話も採用されなかった。

台湾總督府文書には台湾読本第 期の台湾教科用圖書審査会において審査された稿本が残されているが、その卷十には当初台湾由来の二つの物語が検討されたことが記されている。

その一つは以下の「三人ノ貞女」である。

第十七課 三人ノ貞女

昔、彰化ニ劉天章ト云ウ、人ガアリマシタ。ソノ妻ガ二人ノ子オ生ンデカラワ、病氣デシニマシタ。

ソノトキ、妻ノ簡ワ、年ガ二十五デアリマシタ。朝タカナシンデ、シマイニワ、夫ニシタガツテ、シノオト思イマシタ。

トコロガ、天章ノ弟ガイロイロナグサメタカラ、其ノ心オカエテ、二人ノ子オソダテマシタ。

ソノ二人ノ子ワ成長シテカラ、父ノ書才読ンデトチラモ学者ニナリマシタ。簡ワ、二人ノ子ニ妻オトリマシタガ、久シクタ、ナイデ、長子ガシニマシタ。其ノ妻ノ詹ワ二十四歳デアリマシタガ、マタカナシンデ生キテイルコトオコノミマセヌ。ソレユエ、簡ガサトシマスト、詹ワ孝行ナ人デアッタカラ、カンガエナオシテヨク姑ノセワオシマシタ。

ソノ後久シクタ、ナイデ次子モマタシニマシタ。ソノ妻ノ黄ワ、十七歳デ、コノ家エ来テカラ夫オス、メテ、学問オ勉強サセネ、自分ワメシツカイノ用オシテ、一心ニ家ノ名オアゲヨオトシタノデアリマス。トコロガ、夫ガシニマシタユエ、ヨク姑ノセワオシタリ、子供オソタテタリシマシタ。

姑ノ簡ワ、九十歳デシニマシタ。ソノ後、詹ト黄ワ、二人トモ七十歳バカリマデイキティマシタ。コノヨオニ一家ニ三人ノ貞女ガ出タノワ、メズラシイコトダツイデ、人ガミナホメタツイ、マス。

前述の国語学校教授橋本武は図書審査委員でもあつたが、この教材の夫に死なれた妻が子供を残して死のうとすゑる姿に「夫に従つて死のうと思ふなどは不見の甚だしきものなり模範とすべき行為にあらず」という意見を残している。また、最後の一家に三人の貞女が出たという件では、「一家に三人の貞女とは台湾のごとき婦徳の腐敗したる所では珍しいかも知れぬが文明人の徳義としては教て賞すべき程の事にもあらず」とし、「台湾の採訪冊などにある鄭婦貞女の例ハ今日文明世界の道徳の模範とすべきものハなし却て支那語の変な氣風を養成する恐れがありはしまひかと思ふ。」と「文明国日本」の倫理觀を前面に出して台湾の物語を一刀兩断にする所などは傲慢とさえいえる意見を付している。ただ、「三人の貞女」の子供を残して夫の後を追うという点に関しては多くの日本人にとって違和感の多い部分ではないだろうか。日本では母親が子供を残して夫の後を追うことよりも、夫の忘れ形見を心を尽して育て上げることが美德とされよう。日本と台湾の倫理觀の違いを感じる。日本の教科書としては採用

が難しかったのは想像に難くない。

次に取り上げられたのが「朱山の恩」である。

第十六課 朱山の恩

昔、彰化の県令に朱山という人がありました。あるとき、この人が盗人おとらえてしらべると、その顔になみだのあとがありましたから、そのわけおきくと、盗人のいうに、「きつと殺されるだろおと思つて、今朝母にわかれおつて泣いた」と答えました。

その時、山がかれわ孝行の心があるから、盗人おやめるだろお」といって、金お十円あたえてゆるしてやりました。

その後山が県令おやめて帰るとき人民がおおぜい舟まで送つて来ました。その中に、金お持つて来て、山にあげる男がありました。山が「おまえわ何者だ」ときくと、「前に盗人おしてとらえられたもので今わ魚屋おしています。母が昔の御恩おかえすためにこの金おもたせてよこした」と答えました。

山わ、その心にわ感心したが、金わうけとりませぬ。すると、その男が「この金おうけてくださらないのわ、まだわたしお盗人と思つてるのでありましょお。それでわ、家えかえつて老母にあうことができませぬ。」といつて海えとびこみました。人がすくいあげてよおよおいきかえりましたから、山がそのよい人になったことおほめて帰したといゝます。

今度は図書審査委員田中敬一が、朱山が泥棒に金を与えて許してやるときに「訓誨はせぬのか」と記し、教え諭さなかつたことに異義を唱えている。また、朱山が金を受け取らなかつたとき、泥棒が自分をまだ泥棒だと思つてゐるのかといったことに対して「不自然の推量であると述べ」自殺を図つたことについては「余り感心の出来ぬ拳

勤と思ふ」と述べている。そしてこれには橋本武も賛同している。訓戒しなかったことについては異論はあるかもしれないが、他の二点についてはこの物語を読む多くの日本人に共通したものがあるのではないだろうか。

だが、台湾の人の目から見たら、この結末には仕方ないところもある。朱山が一度やった金は受け取れないのもその通りなら、返そうと持ってきた金を受け取ってもらえなくて泥棒の面子がたたないのも道理であろう。台湾の物語として双方をうまく納めるためにこのような結末も仕方ないのかもしれない。

このようにして、第一の台湾読本では台湾の在来の物語が採録されなかったのであるが、その理由は台湾と日本の倫理観・道德観の違いによるものである。これは第一期も同じで、採択されなかった理由を同期の編纂趣意書には「国民的童話伝説八適宜之ヲ採録シタレドモ、台湾固有のモノニ至リテハ一モ採ラズ。是レ敢テ其ノ必要ヲ認メザルニアラザルモ、其ノ多クハ淫猥・虚偽・悪徳ヲ含ミテ、教育上殆ド採用スベキ価値ナキガ為ナリ」と記されている。第二期と同じく、掲載の努力はしたが、日本人である編集者にとつての適当なものではなかったと言つことである。それは第一期も同じであつただろう。それは翻して考えれば、台湾の固有の物語を採録するという事に積極的ではないが、「台湾人にあつた教科書」を標榜しているのであるから、後に非難の出ることを考えて、とりあえず、探して見たという態度を繕つたものかもしれない。あるいは台湾人の倫理観を理解し、そのもつと奥の深い人間性まで透徹する眼差しで本質にたどり着く力を持った編集者がいなかったためということになるのかもしれない。

では、芦田にはこのような倫理観、道德観の不一致はなかったのであろうか。

芦田（一九六二）には孝子に關し、朝鮮人編輯書記と交わした興味深いエピソードがある。朝鮮の孝子たちのいまわの際に親に血を飲ませるという行為に対してこれを当然とする書記たちに芦田はそれを行き過ぎだとし、「子

としての真情は勿論あると思うが、血をすゝめても、それを飲むような不徹底な親がないのさ」と答えている。朝鮮人の親孝行に理解はするが、子供の血を啜る親の気持ちだけは日本人として理解できないのだ。親は子供のことを思わないのであろうかと彼は言ったのだ。

ところが、これに対して芦田は朝鮮の孝子物語を採用しないという結論には至らなかった。芦田の結論は「李坦之」というその血をすすするシーンの出てこない孝子物語を採用することだった。そして、孝行を重視する風潮に対しては、親の子を思う真情をテーマとした「親心」（朝 五 一二）を取り上げ、児童に親の愛情を理解させようとした。これは朝鮮の伝承ではない。朝鮮に類似の彼の眼鏡に叶うものがなかったのかも知れない。中国營口の望兎山の故事を採集したその教材は、子供を案じつつ、狂人となる母の物語で、結末は謡曲「隅田川」にも似て日本人である彼の心情に沿うものだったに違いない。それを子の行き過ぎた行為に対する答えとして読本の中に採用したのだと考えられるのである。

台湾でも、是非台湾由来の物語を載せたいと考えたのであれば、多くの物語から、双方に違和感のないものを選ぶことは可能だったはずである。そうでなくてもこの時期の国語教科書は採録と言っても執筆者の書き下ろしなのであるから、必ずしも原作に忠実である必要はない。たとえば、「朱山の恩」の前半部の朱山の恩情ある采配と盗人の改心の物語は十分教材としてアレンジすることが出来たのではないだろうか。

このような台湾読本の消極的な姿勢を裏付けるものが、台湾読本第 期に採用された清代の灌漑事業について取材した「曹公圳」（台 九 一七）である。

台湾二八到ル処二埤圳ガアツテ、田ヤ畑ニ水ヲ引クノニ大層便利ニナツテマヌ。南部デ一番大キクテ名高イ圳ハ曹公圳

デス。コレハ昔鳳山ノ知県ヲシテ中々曹謹トイフ人ガ、下淡水溪ノ水ヲ引ク為ニ掘ツタモノデ、其ノ水門ハ九曲堂ニアリマス。此ノ圳ハ前後二度ニ出来タノデ、前ノヲ旧圳、後ノヲ新圳トイヒマス。此ノ二圳ガウルホシテ中ル田畑ハ、今デ八九千甲モアルトイフコトデス。

曹公ハコンナ大キナ事業ヲシテ、後ノ世マデモ其ノ徳ヲノコシマシタガ、マダ此ノ外ニモ人民ノ為ヲ思ツテ、色々ヨイ政治ヲ行ヒマシタ。アタリノ人民ハ其ノ恩ヲアリガタク思ツテ、鳳山ニ祠ヲ立テテ曹公ヲ祀リマシタ。教育ニ関スル勅語ニ、「公益ヲ広メ世務ヲ開キ」トイフコトガ仰セラレテゴザイマスガ、曹公ノヤウナ人ハ、ヨク此ノ勅語ノ御趣意ニカナツタ人トイッテヨイデセウ。

本文の描写はあつさりとしたものだが、この曹謹の行為は課中にも「勅語ノ御趣旨ニカナツタ」とあるとおり、台湾の人ばかりでなく、日本人にとつても共感できるものである。日本人の母を持つ鄭成功にしても内地の教科書にも載つた君が代少年孫徳坤にしてもそこには日本の影が感じられる。それがこの物語にはないという点で台湾読本に採択された唯一といつてもいい純粋な台湾由来の偉人の物語である。

ところが、これが第一期になると、「埤圳の話」（台一九七）として次のような内容になる。

私のうちは農家で、水田を五甲ばかり作つてゐますが、大抵は埤圳が通つてゐます。只一甲足らずの田は水がかりの悪い所にあるので、毎年雨の降るのを待つて植附をします。……中略……

昨日学校で農業の時間に、先生が埤圳について、次のやうなお話をなさいました。

「台湾には今大きな埤圳工事が、北と南で二つ始つてゐます。北部のは桃園大圳で、南部のは嘉南大圳といふのです。桃園

大圳は桃園の海岸地方およそ二万甲の田畑に給水するため、大正五年工事に着手したもので、もう大部分は出来て水を通してゐます。これがすつかり出来ると、このあたりで二十万石以上も多く米がとれるといふことです。嘉南大圳は「そう大仕掛な工事で嘉義・台南附近の平野に灌漑する計画です。其の水路をすつと一すぢにつなぐと、台湾の周囲を一まはりするほどもあるさつです。」

かへつてからおとうさんに此のお話をしたら、「そんな大きな埤圳が出来たら、其の地方の人はどんなに仕合せなことでせう。」とおつしやいました。

変更点は二点ある。一つは記述の主体が子供に変わったことである。この時期の教材は児童に親近感を持たせるために多くの教材でこのような書き替えが行われている。例えば、国定読本第 期巻二「キクノハナ」は牧師と児童の淡々とした応答文であつたが第三期巻三「キクノハナ」は子供の視点で書かれた母と子の応答文に唱歌を加えた親しみやすいものになっている。この教材もそのようなものの一つと言えよう。

もう一つは、台湾の先人の業績をたどる教材であつたものが、台湾総督府の事業を紹介し、賞賛する内容に変わった点である。台湾の人々の登場する教材と言う点では後退と言わざるを得ない。本来に台湾由来の伝承を探していたのだとするとこのような変更は理解しがたい。むしろ公学校規則に掲げられている「国民性の涵養」⁴を優先した結果だと考えられるのである。

五 終わりに

以上見てきたように、朝鮮読本第 期での朝鮮由来の人物教材は量的に多いとは言えないが、異文化の彼我の相

違を超えて、学習者に身近な教材を入れるべく芦田恵之助が各地に取材するなど努力した形跡が見られる。それは朝鮮総督府の方針ではなく、新教育運動時代の教育者として児童の自尊心を高めることが教育にとって重要であることを信じ、そしてそれが植民地の教科書であつても必要であることを施政側に立つものとしてではなく一人の教育者として信念を貫いた一人の教科書編纂者によつて行われたものであつた。としても、このような編纂方針は朝鮮第一期にも引き継がれ、朝鮮に採集した教材が数多く見られるのである。決して『初等理科書』のみが、優れた教育者の実践の賜物であつたのではないのである。

一方、台湾読本は新しい教育運動を受け、言語表現などに工夫はあつたものの、台湾固有の材料は少なく、しかもそれに対し教育的ではないという否定的な考え方が継続していた。それは全体的な流れから考えるとそのような材料に出会えなかつたというよりは、台湾固有のものを過小評価する第二期からの編纂方針と、植民地政策として教育に国民性の涵養を求める姿勢を優先するためであると考えられるのである。

註

- (1) この教科書は国民学校の発足決定により、編纂途中で終わった。
- (2) 本稿ではこれらの教科書を国定読本第一期、台湾読本第一期、朝鮮読本第一期のように記す。朝鮮読本については上田(二〇〇〇)の期別に従つた。また、教材の所在については台湾読本第一期卷六第二課を「台六二」のように略記する。
- (3) 本文は分かち書きされているが、煩雑なため、空白を取り除き、句読点を適宜加えた。以下、教科書本文には同様の加工を行うこととする。

（４）国民性の涵養に留意することについては朝鮮も同じである。朝鮮総督府学務課（一九二二）『現行現行教科書編纂方針』にも「品性の陶冶国民性の涵養に資すべき教材を選挙」したことが期されている。

参考文献

- 町田則文（一九九〇）『台湾国語学校』台湾協会会報第十六号
 唐沢富太郎（一九六〇）『教科書の歴史』創文社
 芦田恵之助（一九六二）『恵雨自伝』
 板倉聖宣（一九六八）『日本理科教育史』仮説社
 上田崇仁（一九九九）『植民地朝鮮における言語政策と「国語」普及に関する研究』広島大学院博士課程後期広島大学審査学位論文
 酒井恵美子（二〇〇〇）『台湾公学校用教科用図書審査会報告「国民読本」巻十』『社会科学研究』第二〇第二号
 久保田優子（二〇〇五）『植民地朝鮮の日本語教育 日本語による「同化教育」の成立過程』九州大学出版会
 北川知子（二〇〇七）『国語教育と植民地…芦田恵之助と「朝鮮読本」』植民地教育史年報第九号
 酒井恵美子（二〇〇八）『植民地編纂教科書の中の隠されたカリキュラム』『社会科学研究』第二八巻第 号